

NEWSLETTER #121

p.1 第31回 日本ポピュラー音楽学会年次大会 JASPM31 開催のお知らせ

p.4 2019年度 第2回 関西地区例会報告阪本有佳子・金悠進

Information

p.7 理事会より

p.7 事務局より

第31回日本ポピュラー音楽学会年次大会 JASPM31 開催のお知らせ

【ご挨拶】

大会実行委員長 輪島裕介

JASPM 第31回大会は、2019年12月7日（土）・8日（日）に、大阪大学豊中キャンパスで開催されることになりました。

大会のタイムテーブルは、7日（土）午後に個人発表と特別企画の英語セッション、夕方に総会、8日（日）午前ワークショップ、午後にシンポジウムを計画しています。シンポジウムでは、シン・ヒュンジュン氏（韓国・聖公会大学校）、何東洪氏（台湾・輔仁大学）、ケヴィン・フェレス氏（アメリカ合衆国・コロンビア大学）をお迎えして、近年勃興しつつあるインターアジア及びアジア系アメリカのポピュラー音楽研究との関連のなかで、日本のポピュラー音楽とその研究を位置づける企画を考えています。昨年の30回大会での歴史的な総括を承けて、初心に立ち返りつつ、次の時代を展望することを目指すものです。

奇しくも、2021年の国際ポピュラー音楽学会は韓国・大邱で開催されることが決定しました。1997年の金沢大会に続くアジアで2度目のIASPM大会に向け、国際的・学際的な研究をすすめる好機となればと願っています。

そのための最初のステップとして、7日午後の個人発表と並行して、短い英語発表を行うセッションを企画しています。こちらは随時申し込みを受け付けています。研究キャリアや言語運用能力にかかわらず、奮ってご参加ください。

大阪は古代以来、大陸アジアへの窓口でしたが、一方で、日本近代における民間主導の都市開発の先駆でもありました。大阪北郊に位置する大阪大学豊中キャンパス（元旧制浪速高校）は、20世紀初頭の私鉄沿線開発のなかで風光明媚な郊外型学園として作られた場所です。そのため、阪急梅田駅（JR大阪駅）から約20分、伊丹空港からもモノレールで約5分とアクセスしやすく、また自然豊かな立地です。

12月に大阪大学で皆さんとお会いできるのを楽しみにしております。

日時：2019年12月7日（土）、8日（土）

会場：大阪大学豊中キャンパス

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5

プログラム (暫定版)

12月7日 (土)

12:30 開場・受付開始

13:30～17:00 個人発表および英語セッション

個人発表 A :

A1 13:30～14:10

金子智太郎 (東京藝術大学)

「エアチェック」の普及と1970年代日本の消費文化

A2 14:10～14:50

古川光流 (埼玉大学大学院人文社会科学研究所博士前期課程)

ポピュラー音楽消費の文化社会学的研究—大型会場施設でのライブにおける聴取行為を例として

休憩 14:50～15:00

A3 15:00～15:40

加藤賢 (大阪大学大学院文学研究科博士後期課程)

グローバル化に抗するもの/抗するもの:2010年代以降の「渋谷系」再評価を事例に

A4 15:40～16:20

Martin Roberts (Dartmouth College)

Three-Dimensional Music: Cornelius's Animated Soundworlds

個人発表 B :

B1 13:30～14:10

田口裕介 (神田外語学院)

音程の零度—吹奏楽における音楽機器と身体技法

B2 14:10～14:50

江口聡 (京都女子大学)

大学初年次教育におけるポピュラー音楽の利用

休憩 14:50～15:00

B3 15:00～15:40

宮坂遼太郎 (東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科修士課程)

日本の公共空間における音楽実践の可能性について—現況の整理、および自身の試みの整理

B4 15:40～16:20

山崎海子 (日本大学大学院芸術学研究所博士後期課程単位取得満期退学)

ロック・フェスティバルとフェス—空間の構築とサスティナビリティ

B5 16:20～17:00

ベニー・トン (シンガポール国立大学)

演歌・歌謡曲のカラオケ実践におけるセクシュアリティの再検討

13:30～17:00

International Popular Music Studies Presentation Session

17:10～18:10 総会

18:30～20:30 懇親会

12月8日 (日)

9:00 開場・受付開始

9:30～12:30 ワークショップ

ワークショップ A :

ミュージックツーリズム—「音楽と観光」の関係を(再)検討する

代表者: 宮入恭平 (立教大学ほか)

発表者: 永井純一 (神戸山手大学)

吉光正絵 (長崎県立大学国際社会学部)

澤田聖也 (東京藝術大学大学院博士課程)

遠藤英樹 (立命館大学)

討論者: 葛西周 (東京藝術大学ほか)

ワークショップ B :

戦後音楽文化史再考—フォーク、ロックミュージックのトポロジー (仮)

発表者: 粟谷佳司 (立命館大学)

馬場伸彦 (甲南女子大学)

討論者: 平石貴士 (立命館大学)

ワークショップ C :

貫戦期日本ポピュラー音楽における越境の諸相:日系アメリカ人、カウガール、上海リル

代表者: エドガー・ポープ (愛知県立大学)

発表者: 永富真梨 (摂南大学)

張佳能 (大阪大学大学院博士課程)

平川亨 (明治大学大学院博士課程)

討論者: 青木深 (東京女子大学)

12:30～14:00 昼休み

14:00～17:00 シンポジウム

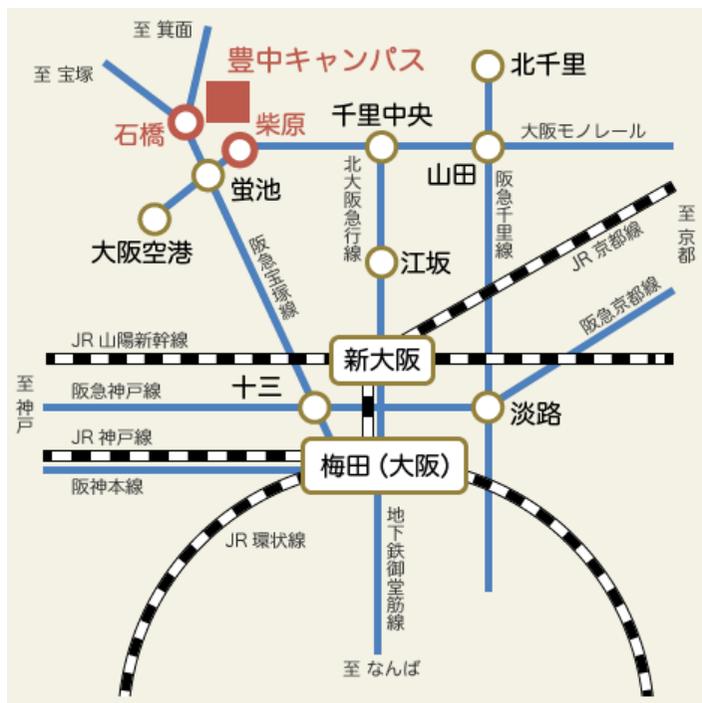
アジアの東、アメリカの西:環太平洋ポピュラー音楽の地政学 (East of Asia, West of America: The Geopolitics of Transpacific Popular Music)

パネリスト: シン・ヒョンジュン (韓国・聖公会大学校)

ケヴィン・フェレス (アメリカ合衆国、コロンビア大学)

何東洪 (台湾・輔仁大学)

会場アクセス



2019 年度第 2 回関西地区例会報告 阪本有佳子・金悠進

修士論文・博士論文報告会

日時：2019 年 3 月 19 日(火)14:00~18:00

会場：大阪大学 豊中キャンパス 文法経講義棟 文 13 教室

報告者：

加藤賢(大阪大学大学院文学研究科音楽学研究博士前期課程)

芦崎瑞樹(大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士前期課程)

西浦直輝(大阪府立大学大学院文学研究科前期博士課程)

永富真梨(同志社大学グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程)

発表 1:

『渋谷系』と『渋谷』のあいだ-ポピュラー音楽の
ローカルティ形成と変容- (修士論文)

加藤賢(大阪大学大学院文学研究科音楽学研究博士前期課程)

本発表は、1993 年に登場した「渋谷系」を取り上げ、渋谷系とは渋谷の音楽なのか、渋谷系はいかにして(いつから)渋谷の音楽になったのかを研究目的とした、ポピュラー音楽のローカルティ形成と変容を検討した修士論文の報告でした。

まず初めに、問題意識として、2010 年以降の「渋谷系」の再評価、渋谷区行政における「渋谷系」ミュージシャンや楽曲の重用があげられ、「渋谷系」が「渋谷系」と呼ばれるに至った経緯の整理がなされました。

次に、ローカルティの理論的枠組みとして、W・ストロー(1991)の「シーン概念」(1991)を用いたこと、「渋谷系」のローカル性の変遷については木本玲一(2009)の「実体的ローカル性/認識的ローカル性」の二分法を用いたことが提示されました。

「渋谷系」前史として、1978 年以降のニューウェーブから 1994 年頃までのアシッド・ジャズ、レア・グルーブを上記の方法を用いて考察した結果、前史においては特権的に「渋谷」と結びついた音楽実践はほとんどなく、あったとしてもマーケティング戦略によるものがほとんどであること、この時点における「渋谷系」のローカル性は、実体的論/認識論の双方においてミュージシャンではなく、リスナーや店舗によってのみ「渋谷」と結びついていたこ

とが明らかにされました。つまり、「渋谷系」ミュージシャンが「渋谷」のことを歌っていたなどではなく、「渋谷」で局地的に売れているミュージシャン群を指す用語として「渋谷系」という言葉が使われるようになっていったということです。

1990 年代後半、「渋谷系」という言葉は「渋谷」の若者文化全体を指す言葉として、広く使われるようになると同時に、「渋谷系」ミュージシャンたちが「渋谷系の場」から離れるような動きを見せたことで「渋谷系」は拡散・衰退していきます。しかしながら、「ポスト渋谷系」などと呼ばれる「渋谷系」のフォロワー群の存在がありました。彼らの存在は、現実の地理空間を離れ、架空世界のサウンドトラックと化した「渋谷系」の一つの形と捉えることができます。

そして、2008 年のカジヒデキの活動本格再開をきっかけに、第一世代の「渋谷系」ミュージシャンたちが「渋谷」に帰着する現象が見られ始めます。2010 年代中頃からは、渋谷区行政と結びつく形で、過去に例のない、「渋谷系の場」経験者たちによる「渋谷系」を冠した活動が行われ始め、実体的論/認識論の双方において「渋谷」を表象する「渋谷系」が誕生しました。

発表 2:

「輸入大衆音楽のカテゴリー化—『ポップス』の語を中心—」(修士論文)

芦崎瑞樹(大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士前期課程)

現在、広く使われている「ポップス」という音楽カテゴリーが日本で使われるようになったのはいつのことなのか、また、音楽雑誌を中心としたメディアで「ポップス」という語がどのように現れているのかを明らかにすることを目的とし、『ミュージック・ライフ』誌(以下 ML 誌)を中心とした「ポップス」の用法の調査をもとに、「ポップス」という語を考察した修士論文の報告でした。

主に、「ポップス」という語の日本における流れが説明されました。「ポップス」という語は、戦後初期(1953 年頃)からすでに使われ始め、当時、この語は、「通俗名曲」や「セミ・クラシック」と呼ばれた音楽と近いものとして現れました。ML 誌においては、輸入大衆音楽を指す言葉には「ポピュラー」が使われており、歌謡曲とジャンルがはっきり区別されていました。ここでの「ポピュラー」は

ロックンロールやR&Bのことを指しており、「ポップス」が「ポピュラー」を引き継ぐかたちで現れていることがわかります。しかし、「ポピュラー」に対応する語として「アメリカン・ポップス」といった表記がなされていることなどから、1950年代には、「ポップス」という表現が文中に現れることはきわめてまれなことでした。

1962年には、ML誌が『ポピュラー・ミュージックの雑誌 ミュージック・ライフ』に改名しますが、文中に「ポップス」の文字は一度も現れませんでした。1964年には、文化放送で『電話リクエスト ハロー・ポップス』の放送が始まりますが、ここでも、番組名以外で「ポップス」という語が現れることはありませんでした。1960年代半ばになると、「日本製の洋楽」というニュアンスを含む「和製ポップス」が現れます。これにより、それまで洋楽≒「ポップス」であったのが、「和製ポップス」をめぐってカテゴリーの境界線が問題となり、ML誌の誌面上では「和製ポップス」を認めるかどうかについての議論が occurs します。このことと、同時期の英米の音楽スタイルの急速な変化を背景に、1968年中頃には「ポップス」の語は誌面に定着したと言え、同時に、「ポピュラー」の使用は見られなくなっていくます。

そして、1960年代中頃まで、「ポップス」に内包される概念として扱われてきた「ロック」が、1960年代末の「フォーク・ロック」のムーブメントを背景に、「ポップス」から分離していきます。1969年には『ニュー・ミュージック・マガジン』が創刊され、1973年になると、ML誌が『ロック・ジェネレーションのためのミュージック・ライフ』と改名し、「ポップス」よりも「ロック」に対する言及が中心になっていきました。1970年代には、ミニコミ・深夜ラジオなどの若者文化を通して、1960年代のポピュラー音楽の影響関係やスタジオ実践といった「裏方」としての「ポップス」言説がなされ始め、「ポップス」はよりマニャックかつ非商業的な形で語られるようになっていきます。これに参加していた大瀧詠一や山下達郎のようなミュージシャンは、「ポップス」と結びつけられ、権威化されていきます。

1980年代末、J-WAVEにて「J-Pop」の呼称が決定され、1990年代半ばにかけて普及していきました。

(関西大学大学院・阪本有佳子)

発表 3:

『「アイドル声優」の成立とその構造—声と身体の関係性を中心に』(修士論文)

西浦直輝(大阪市立大学大学院文学研究科前期博士課程)

日本において声優といえば、本来は裏方の存在としてみられてきた歴史がある。しかし、なぜ裏方だったはずの声優が「アイドル化」しているのか。すなわち、文字どおりの「声優」ではなく、なぜ「人前に姿を晒すことを前提に持つ芸能人」として捉えられるようになったのか。報告者は、このような問題意識を修士論文の主軸とし、本報告では、声優のメディア的構造に着目した。とりわけ、「声」が「身体」から切断され、異なる「身体」へと再結合される過程、そして身体の複数化が「アイドル化」に対して及ぼす影響に焦点を当てた。

報告者は、「声優」を、一つの「声」に対して、「役の身体」と「声優自身の身体」という二つの身体像の対応が確認できる存在として定義づける。ここに身体の二重性を見出し、一つの声に二つの身体が対応する構造を明らかにする。第一に、声優からキャラクターに向かう影響を論じ、第二に、キャラクターから声優に向かう影響を分析する。

まず、「自分以外の存在を演じること」の参照項として、歌舞伎の上演構造、ポップソングの歌詞における主体化構造を取り上げる。ロランバルト「声の肌理」を参照しつつ、声優の声と身体結びつき、そして声優の声とキャラクターの身体における再結合の構造を論じる。

次に、キャラクターのものとして認識された声は、声優本人のものとは別に、物語文脈における固有の身体性を生み出していく。そして、声優が姿を現し、キャラクターの声を発することで、キャラクターの身体性は声優本人の身体へと還元される。

ここで報告者は、キャラクター固有の身体性は「萌え」という現象と深いかわりがあると述べる。ササキバラ・ゴウや小森健太郎、伊藤剛らの理論を援用しつつ、性格類型としての「萌え」は作品テキスト内のエピソードの積層によって成立すると論じる。そして、キャラクター固有の身体性も同様にエピソードの積層によって生ずる。したがって、キャラクター固有の身体性が声優本人に還元される時、そこにはキャラクターの「萌え」も付随していると論じる。

報告者はこれらの実証過程を踏まえ、アイドル声優としての魅力は、本人の持つアイドル的魅力と、キャラクターから還元されてくる「萌え」の相互作用によって成立していると結論づける。

フロアからは「声優」と「俳優」の違いについての疑問が投げかけられた。声優が「アイドル化」する、すなわち、文字どおりの「声優」ではなく、「人前に姿を晒すことを前提に持つ“芸能人”」となることによって、「俳優」といかなる共通点と相違点を見出せるのか。つまりここで言われていることは、声優に限らず俳優全般にも言えることなのではないか。声優に特有と言えるのはどのような点か。

本研究は、これまで先行研究の少ない声優論に真正面から斬りこむことによって、「優（わざおぎ）」をめぐる問題に対し、新たな議論を喚起していたといえよう。

発表4:

「東京ロデオ・カントリー音楽の越境と 日本人男性性の危機」(博士論文)

永富真梨(同志社大学グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程)

なぜ日本人男性は、カントリー音楽とその主要なシンボルであるカウボーイのイメージを消費、受容、批判したのか。報告者はこの問いに答えるため、新聞、雑誌、楽曲、広告などにおける、日本人男性がつくりあげたカントリー音楽やカウボーイのイメージ、描写、言説、表象を中心に分析しつつ、加えて、伝記やインタビュー、写真から取得したカントリーを演奏した日本人男性ミュージシャンの実践と体験を考察する。

とりわけ1920年代から1960年代半ばまでは、カントリー音楽とカウボーイのイメージが、男性像と国家のアイデンティティーについての危機と密接に関わりあった時代であったと述べる。1920年代から1930年代後半、日本帝国の侵略がアメリカ的なライフスタイルと消費文化とともに進み、戦後から1950年代半ばは、戦前とは異なる新しいアイデンティティーを、近代国家の形成という戦前からの遺産を引き継ぎながら求めた時代である。そして、1950年代後半から1960年代前半は、経済的に自立したものの、急激な経済成長が日本を商業主義の単なる餌食にさせてしまうのではと危惧した時代として位置付けられる。

報告者はこの約半世紀近くのあいだに、日本人男性は、カウボーイとカントリー音楽を利用して理想の男性性を作り上げようとしたと論じる。

例えば、1920年代から1930年代後半、灰田勝彦のカウボーイソングのカバー「いとしの黒馬よ」を事例に、灰田は周縁的な男性性を持ち合わせたからこそ、周縁的なカウボーイを演じることが可能であり、ひいては、力強い、純血的日本人男性像が覇権的男性像として補完されたと述べる。

さらに戦後から1950年代半ば、戦後直後のカントリーミュージシャンは、戦前とは違う理想の戦後日本を象徴する男性性を、カウボーイ姿になってカントリーを演奏することで体現しようとしたと論じる。

そして、1950年代後半から1960年代前半、主要メディアは日本人カウボーイを異性愛中産階級の生産性を伴った真つ当な男性モデルとして表象したとし、カウボーイの「勤労さ」や、「つましい」出自が強調され、高度経済成長期に商業主義の餌食と化す危惧から、理想的な男性像がカウボーイに投影されたと論じる。

以上を通して報告書は、日本人男性は、カントリーとカウボーイを、必ずしもアメリカの歴史や文化、または日米関係を理解するためだけに受容したのではなく、カントリー音楽とカウボーイのイメージを利用して、彼ら自身の、日本人男性性について議論していたと結論づける。

フロアからは、アメリカ音楽の受容、ならびに日本の洋楽受容は、やはりアメリカへの憧れや、アメリカの流行を模倣しているにすぎないのではなどの指摘があった。本研究は、日本におけるアメリカ文化の受容を考察する事例研究であるが、これまでの洋楽受容研究にも一石を投じる試みの一つとして捉えられる。カントリーの受容を、日本人男性性が戦わされた場として捉えようとしており、「アメリカ化」を所与のものとしつつも、そこに新たな視座や問題意識を提示していたと考えられよう。

(京都大学大学院・金悠進)

◆information◆

理事会より

託児補助金支給制度について

日本ポピュラー音楽学会では、本年度より託児補助金支給制度を開始いたしました。今年12月の大阪大学での大会から利用することが可能です。ふるってご利用ください。この制度の利用のしかたは以下のとおりです。

<http://www.jaspm.jp/?p=2895>

- ① 対象となるお子さんは小学生以下とします。2人以上のお子さんについても申請ができます。
- ② 託児施設(サービス)への依頼は、申請者をご自身で行なってください。依頼先の託児施設(サービス)は、学会開催地の近くでも、ご自宅・ご実家の近くでも、どちらでもかまいません。
- ③ 補助金額は、お子さん1人につき上限1日5,000円、会期中の2日間を限度とします。利用料金が1日5000円未満の場合には、利用料の実費が支給されます。
- ④ この制度の利用をご希望の方は、学会ホームページから「託児補助金申請書」(書式1)、「託児施設(サービス)利用証明書」(書式2)をダウンロードしてください。
- ⑤ 「託児補助金申請書」(書式1)に必要事項をご記入のうえ、大会の1週間前までにメールの添付ファイルで学会事務局(jimu@jaspm.jp)にお申し込みください。折り返し、託児補助金申請受付のメールをお送りします。
- ⑥ 大会当日、受付に「託児施設(サービス)利用証明書」(書式2)を提出してください。当日提出できなかった方は、速やかに学会事務局に郵送してください。
- ⑦ 「託児施設(サービス)利用証明書」(書式2)の受領を確認しましたら、ご指定の振込先へ補助金を振り込みます。なお、振り込みをもって領収書に代えさせていただきます。
- ⑧ 個人情報については、学会が責任をもって厳重に取り扱います。
- ⑨ ご所属の大学、研究所等に同様の制度がある場合は、そちらをご利用ください。

事務局より

1. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちでJASPMの活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から1,000字から3,000字程度が望ましいです。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

ニュースレターは学会ウェブサイト掲載のPDFで年3回(2月、5月、11月)の刊行、紙面で年1回(8月)の刊行となっております。住所変更等、会員の動静に関する情報は、紙面で発行される号にのみ掲載され、インターネット上で公開されることはありません。PDFで発行されたニュースレターはJASPMウェブサイトのニュースレターのページに掲載されています。

(URL : <http://www.jaspm.jp/newsletter.html>)

8月の紙媒体での発行号については、会員の動静に関する個人情報を削除したものを、他の号と同様にPDFにより掲載しております。次号(122号)は2019年11月発行予定です。原稿締切は2019年10月20日とします。また次々号(123号)は2019年2月発行予定です。原稿締切は2020年1月20日とします。

投稿原稿の送り先はJASPM 広報ニュースレター担当(nl@jaspm.jp)ですので、お間違えなきようご注意ください。ニュースレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

2. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局 (jimu@jaspm.jp) まで郵便または E メールでお知らせください。ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。例会などのお知らせは E メールにて行なっております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

3. 会費請求と会員のメールアドレス問い合わせについて

2019年3月に、2019年度の会費請求書類を、学会誌 Vol.22 (2018) と一緒に会員の皆様のお手元にお届けしました。学会誌は2018年度の会費納入者にお送りしておりますので、学会誌が同封されていない場合は、速やかに会費を納入いただきますようお願いいたします（会費納入後速やかに会誌を送付いたします）。

なお、会員の皆様には、電子メールにて随時、学会からのお知らせ「JASPM メールニュース」をお送りしておりますが、最近、メールが不着となる会員の方が増えております。そのため、会費請求書類とあわせて、会員の皆様に最新のメールアドレスの問い合わせに関する書類を同封しております。メールニュースが届いておられない会員の皆様につきましては、ご留意の上ご回答いただきましたら幸いです。

JASPM NEWSLETTER 第121号
(vol.31 no.3)

2019年9月2日発行

発行:日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 井上貴子

理事 毛利嘉孝・細川周平・南田勝也・
東谷護・増田聡・鈴木洋子・伏木香織・
輪島裕介・日高良祐

学会事務局:

〒120-0034

東京都足立区千住 1-25-1

東京藝術大学 千住キャンパス

大学院国際芸術創造研究科

毛利嘉孝研究室内

jimu@jaspm.jp (事務一般)

nl@jaspm.jp (ニューズレター関係)

<http://www.jaspm.jp>

振替:

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集:日高良祐